新渡戸稲造と柳田国男

―新渡戸稲造の「地方の研究」から柳田国男の「思い言葉」教育へ―

『柳田國男全集』編集委員　小田　富英

一、先行研究から

1、橋川文三の指摘を始点として

本論に入る前に、新渡戸稲造から柳田国男へと繋がる学問的な系譜についての先行研究に触れておきたいと思う。とくに昨今の柳田研究において、先行研究が置き去りにされて同じような主張が繰り返されている感が強いため、必要な手順と考えるからだ。

私たちが、この問題を論ずる時、戻らなくてはならない基本的情報は橋川文三の次のような指摘である。

「ハイネのほかに、柳田の民俗学への接近に直接影響したと思われる人物のうち、その時点をほぼ確かめることのできる一人は新渡戸稲造である。新渡戸は柳田より十三歳の年長者で、欧米留学の後、明治二十四年、札幌農学校において日本では初めての農政学を開講したパイオニアであり、その著書『農業本論』（明治三十一年刊）は「日本における綜合学としての農政学に一つの礎石をすえたもの」（小野武夫）にほかならなかった。柳田や河上肇の農政思想も、この書物の少なからぬ影響を受けて形成されたのである。」[i]

橋川は続けて、新渡戸の地方学（ぢかたがく）（Ruriology）研究の提唱は、あたかも柳田のために言われたかの印象だと述べたあと次のように続けている。

「柳田がこの書を手にしたのは、恐らく大学時代、「農政学を一頁でも！」[ii]と考え始めた頃のことであろう。

そして恐らく、農政学を含む世界的視野と、それが民間のもっとも小さなものへの関心にも応えねばならない学問であることを、共感をもって理解したのはこの書物によってではないかと私は想像する。」

こうした橋川の想像的指摘に応えたのが、橋川の教え子であった後藤総一郎であった。

後藤は、橋川の指摘から十二年後、『地方史研究マニュアルⅠ』に「地方学の形成」を発表し、二人の学問的交流とその「原初のイメージ」を描いた。[iii]後藤は、この論のなかで、師である橋川の提起に応えるように、新渡戸の講演記録の「地方の研究」と、柳田の村落調査、口承文芸採集の方法論と結びつけ、以下のように結論づけている。新渡戸の「地方の研究」についての分析は後述することとして、まずは後藤の結論を紹介したい。

「柳田国男は、新渡戸のこの「地方学」を発展、展開させ、農民救済のさらに日本人の幸福の達成に向かう、もっともラディカルな「自己認識」の学として位置づけ大成しようとしていったのである。

農政学→（地方学）→郷土研究→民俗学と展開されていったコースのなかで、そのもっとも重要なこの学問の担い手である地方の郷土史家の発見とその研究の波紋の広がりの見事なひとつの実りを、わたしたちは、大正三年の『郷土研究』第二巻第一号から寄稿するようになり、のちに信州一円にその輪を広げて、いわばパイプ役ともなっていった松本市の胡桃沢勘内のことを思わないではいられない。（略）

「野の学」から「官の学」へとその主流が移行していった今日の民俗学に、かつてその原初に抱かれた新渡戸や柳田国男の強烈な農政学の延長線上の学問的モチィーフと方法意識はもはや不在であるかもしれない。だがその原初の学問的魂は、さまざまな学問領域のなかで、受けつがれ再構築され、検証され、展開されようとしていることだけは事実である。

その意味では、「地方学」の思想は今日も生きているといえよう。」

新渡戸と柳田を繋ぐ接点に、在野の民俗学者胡桃沢勘内[iv]を位置づけたところが、後藤らしい指摘であったが、残念なことに、私を含む当時の読者層に浸透していかなかった。この流れを緻密な検証をもとに論じていこうと試みたのが、後藤の教え子であった村松玄太であった。村松は、まず手始めに、論文「近代日本における地方の思想に関する一考察―新渡戸稲造と柳田国男の地方観を中心に―」[v]において、新渡戸の「地方学」と、柳田への影響を克明に抽出し、その上で柳田国男の地方観の発展を追い、その論を発展させる「柳田国男の地方観」[vi]を続けて発表した。村松は、その論の出だしを明治十四年以降の地方改革と日露戦争以後の地方改良運動と官僚の役割を押さえた上で、農政官僚柳田国男の登場を位置づけた。

そうした流れのなかで、柳田が新渡戸の地方学に共鳴する必然を次のようにまとめている。

「官僚時代の柳田の地方論について要約的にまとめれば、柳田は日本の農村の貧しさへの問いから疑問を出発させ、その豊かさをいかに作り出すべきかに考察を進め、農民の自発性の喚起に期待する。またその際に中央主導の画一的な政策付与では、意味を持たないことを指摘したのだった。そうした主張は、当時の官界、学界から大きな批判を受ける結果となったものの、柳田自身は一九一〇（明治四十三）年、新渡戸稲造の提唱する「地方学」に共鳴し、自ら積極的に「郷土会」の設立に参与する。農村研究に向けて、徐々にその志向を強めていくのである。」

ここまで見て来た新渡戸稲造の地方学と柳田国男の郷土研究を結びつける研究は、橋川の指摘を受け継いで後藤総一郎、村松玄太と政治思想史研究の分野で進化してきたのである。

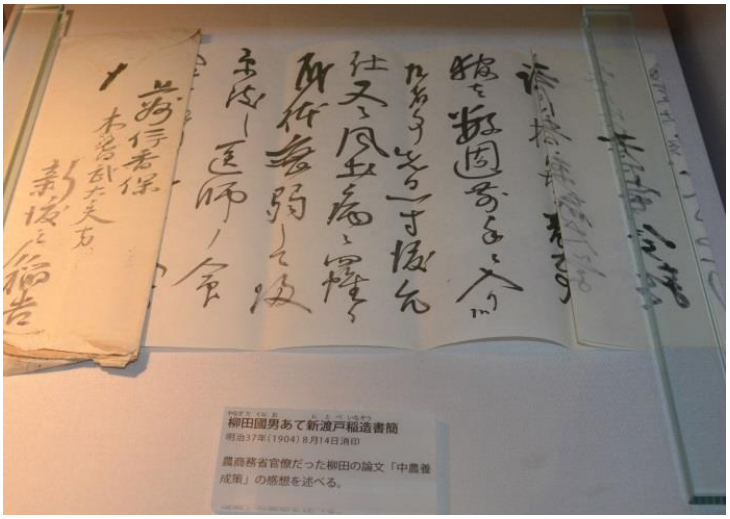
2、その他の先行研究

この流れとは別に、基本情報として共有しておかなければならないことは、書簡の発見などの伝記的事項と、農政学および農業政策史の分野での研究の進展である。

新渡戸稲造から柳田国男に宛てた書簡は、『新渡戸稲造研究』第二号において藤井隆至の解説がついて発表[vi]されているので詳述は避けるが、この書簡の発見によって、前述の橋川の想像的指摘が実証されたということである。ここでは、その点に絞って紹介するに留めたい。藤井隆至は、解説のなかでこの書簡を一九〇四年（明治三七年）八月一四日のものと確定し、次のように述べている。

「この書簡から読み取れる第一は、明治三七年の時点で新渡戸と柳田がすでに交友関係をもっていることである。柳田国男の伝記的研究で新渡戸の名前が登場するのは、明治四三年にはじまった郷土会が最初であったから、この書簡の発見は、交友の関係を六年以上さかのぼらせることになる。

第二に、新渡戸は柳田の論文をたいへん尊重している。台湾から帰ったあと「風土病」療養のために各地の温泉に出かけたが、群馬県の「磯部温泉」にも「中央農事報」（「御高論ノ雑誌」）をわざわざ携行し、「中農養成策」の「第一回分と弐回分」を「拝読」している。またこの礼状も、柳田からの郵便物を受けとったその日のうちに執筆している。



柳田国男宛て新渡戸稲造書簡（遠野市立博物館提供）

（封筒表）　東京　農商務省農務局　　柳田国男殿　親展
（封筒裏）　上州伊香保　木暮武大夫方　新渡戸稲造
（書簡）
去月五日京都大学宛テノ御芳墨今朝拝受仕候尤も如何なる都合なりしや御高論を掲けたる農事報者数週前手ニ入り候拙者事先日一寸渡台仕又々風土病ニ罹り身体衰弱して帰京し医師ノ命令ニ依り過日来諸所ニ転地療養　在至ル所ニ御高論ノ雑誌を携帯し熟読の上御礼申し　けんと存し既ニ磯部温泉ニ保養中も第一回分と弐回分丈け拝読せるも其後読書ハ静養中成るべく為さゝる覚悟なれハ未た全く拝見不仕為めニ
何とも御高見ニ対スル言葉を発スルコト不能りし処本日落手御書面ありしかバ一先わ御礼申上候拙者ハ御高論の一と二回ニある農民数過多ナル点ニ就きてハ頗ル御同感なり従来ノ如き生計低キ程度ニ比スルハ兎も角経済進ムト共ニ百姓ノ生計も進まされハ現今の農民ハ Pauper Peasant の如きものなれハ決して感心スベキモノニ無之と存じ農政ノ局ニ在ル方々の広くSocial Progressの大体ニ御注意ありて其の本分を尽されんこと切望ニ不堪御目ニかゝりて御高説を伺ひ度き事山々有之候得共拙者ハ執筆甚々不如意の為め紙上ニつくし不能何れ拝顔の上
八月十四日
新渡戸
柳田学兄

第三に、農民の生活水準という問題に新渡戸は共鳴している。農民問題についての基本的な着眼点の面でも、新渡戸と柳田は関心をわかちあっている。」
この藤井の指摘のように、新渡戸の『農業本論』を学生時代に読み、官僚になって提案した「中農養成策」を新渡戸に送り、新渡戸もまた柳田を評価するという関係が浮かび上がってくる。これを藤井が言う「交友関係」と言えなくもないが、

この時まだ、直接会ってはいなかったことだけは押さえておきたい。

さらに、近年になって再び、農政官僚としての柳田国男に焦点をあてた研究が注目されるようになってきたことも押さえておきたい。その代表作が、山下一仁の『いま甦る柳田國男の農政改革』[viii]で、農政官僚としての実務と研究の両輪からの久々の問題提起となる名著である。しかし、残念なことに新渡戸との関係には触れていない。柳田国男と新渡戸稲造の思想的な関係を論じて話題となった佐谷眞木人の『民俗学・台湾・国際連盟　柳田國男と新渡戸稲造』[ix]においてでさえ、「両者の関係、とくに思想的連関とその社会的背景に関するまとまった論考は、いままでほとんど書かれていない」と断定されてしまっている。しかし、一方でこの両著の参考文献に名前が載る並松信久[x]の研究は、前述の橋川、後藤、村松の政治思想史研究を土台とした農政研究の息吹が感じ取れるほどのものであり、もっと全うに評価されてよいと考える。

3、柳田国男年譜に登場する新渡戸稲造

次に、柳田国男の年譜のなかにみる新渡戸との関係性についてみてみよう。まず、私が作成した「柳田国男年譜」のなかで、新渡戸稲造が登場するのは、以下の三四ヶ所である。個別の論は本論にまわすこととして、事実を押さえるために紹介する。

柳田国男年譜（拙稿の「年譜」『柳田国男全集』別巻1[xi]をもとに加筆したもの。年表記は西暦とした。）

一九〇四年七月　五日　「中農養成策」を掲載した『中央農事報』を、京都大学宛てで、新渡戸稲造に送る。

同　年　八月一五日　この日あたり、「中農養政策」の感想が書かれた十四日付けの新渡戸稲造からの手紙が届く。

一九〇七年二月一四日　報徳会第二回例会で新渡戸稲造の「地方の話（地方の研究）」の講演を聴き、新渡戸の提唱する地方学に強い影響を受ける。講演の前、新渡戸を囲んで沢柳政太郎、留岡幸助、岡田良平ら三十人あまりと食事をする。

同　年年七月一〇日　大日本農会より新渡戸稲造、横井時敬らと共に農芸委員に委嘱推薦される。

一九一〇年六月二五日　この頃、贈った『石神問答』のお礼の二十三日付けの新渡戸稲造からの手紙が届く。そこには、自分も、宗教と農業の関係に興味をもっていると書かれていた。

一九一〇年一二月四日　新渡戸稲造宅で郷土会が結成され、定期的に会合をもつことになる。創立期のメンバーは、柳田以外に、新渡戸

稲造、石黒忠篤、小田内通敏、木村修三、有馬頼寧、小田島省三、十時弥、小平権一、草野俊輔、小野武夫、牧口常三郎、高木誠一、会津八一らで、それまで柳田家で行っていた郷土研究会を合併吸収することになる。当時は、農政学に専念する決心をしていた。

一九一一年三月三日　新渡戸稲造宅で開かれた郷土会に出席する。

一九一二年六月四日　郷土会で、新渡戸稲造が、「三本木村の興立の話」をし、自らの郷土を語る。

同　年一〇月二一日　新渡戸稲造宅で開かれた郷土会に出席する。

一九一三年三月三日　新渡戸稲造宅で開かれた、郷土会第十五回例会に出席し、石黒忠篤の農家の構造についての報告を聞く。

同　年　四月二五日　新渡戸稲造宅で開かれた、郷土会第十七回例会に出席し、二宮徳の伊豆と丹波の旅行談「伊豆の白浜と丹波の雲原」を聞く。女子師範の野村八良と侯爵徳川義親が初めて参加する。

一九一三年六月四日　新渡戸稲造宅で開かれた、郷土会第十八回例会に出席し、新渡戸稲造の「三本木興立の話」と題した新渡戸家の青森県上北郡の三本木開拓の歴史の話を聞く。

一九一三年七月二五日五時半から新渡戸稲造宅で開かれた、郷土会第十九回例会に出席し、十時弥の「日本における犯罪の性質とその分布」の報告を聞く。

同　年　九月二六日　新渡戸稲造宅で開かれた、郷土会第二十回例会で、小田内通敏の研究調査旅行の土産話「大山及三峰の村組織」を聞く。

同　年一二月五日　新渡戸稲造宅で開かれた、郷土会例会で、小田島省三から長野延徳沖の水害の話を聞き、高梨黒姫伝説との関連を考える。講演が終って、漢字の研究者後藤朝太郎が、亀卜文字の話をする。

一九一五年一〇月二〇日郷土会第三十六回例会に出席して、新渡戸稲造から「桜島罹災民の新部落」の報告を聞く。折口信夫も出席する。

一九一六年一月一二日新渡戸稲造宅で開かれた郷土会第三七回例会に出席する。この回は出席者各員が順番に短い話をし、新渡戸稲造から三本木野開発の追加の話を聞く。

一九一八年一月一〇日この日から十九日までの十日間、東京農業大学で、帝国農会主催の道府県農会主任技師講習会が開かれる。新渡戸稲造、那須皓、松崎蔵之助、安藤広太郎らと共に講師を務め、「将来ノ農政問題」を講義する。

同　年九月二一日　長谷川一郎と弟の薫一が訪ねてくる。長谷川兄弟と共に、内郷村調査の報告会となる郷土会に出席するため新渡戸稲造宅に向かう。調査者の他に　石黒、牧口、小田内、中村留二ら常連と、今井登志喜、瀬沼寛二、高橋勇、山中省二が参加する。報告について、「依然として雑話なり、少しも学問的に非ざりし」との感想をもつ。

同　年一〇月一二日　一六日に開かれる郷土会の出席通知を新渡戸稲造に出す。

一九一九年一〇月五日　喜善から、「奥州のザシキワラシ」の原稿が届き、読んだ感想を書いた返事を出す。そこで、原稿のなかにあった「赤子を家の内ニ埋める風習」については、フレーザーやゴンムも書いているのが、ゴンムは新渡戸稲造から借りて読んだが、フレーザーの本は持っているので今度貸ししてもいいと書く。

一九二一年七月一六日　ジュネーブのオテル・ボー＝セジュールから三千に絵葉書を送り、そのなかで新渡戸稲造や国際連盟経済封鎖委員会委員となった法学博士岡実と同宿していると書く。喜善には、ホテルの庭園を気に入り「人の来ぬ公園」と紹介する葉書を書く。

一九二一年九月七日ベルリーヴ湖畔のレストランで、朝日新聞のパリ特派員として来ている町田梓楼や、関口泰、森戸辰男、大田章らと食事をする。国際連盟総会会場前で、新渡戸稲造、新渡戸の秘書役の原田健をまじえて写真を撮る。（写真参照）孝宛てにこのことを伝える葉書を書く。

一九二二年一月八日　新渡戸稲造がエスペラントに関して国際連盟に提出した報告書を読み終わる。

同　年六月二七日　連盟事務局に行き、新渡戸稲造やラパール教授らに会う。

同　年八月一四日　新渡戸稲造と昼食を食べる。

同　年八月三〇日　連盟事務局で新渡戸稲造に会い、南島談話会の報告をする。その場にいたプリヴァ博士に再び会う。

同　年八月三一日　那須皓の一家が訪ねてきたので、レマン湖北岸の新渡戸稲造の私邸レ・ザマンドリエまで案内する。

同　年九月三〇日　夜、川西実三の家での日本食の食事会に新渡戸稲造と共に招かれる。

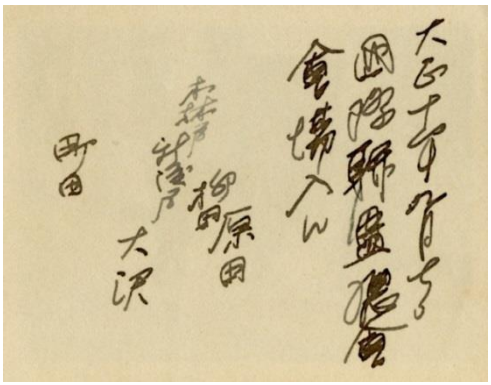
同　年一一月四日　連盟事務局での茶会に出て、新渡戸稲造と藤沢親雄の話を聞く。

同　年一一月九日　新渡戸稲造を誘って、ボーセジュルで昼食を食べる。夜、コメディー座にハウプトマンの「織工」を見に行く。

一九三三年一〇月一六日この日、第五回太平洋会議に出席するためカナダバンクーバーに滞在中の新渡戸稲造がすい臓腫瘍のため亡くなる。享年七十二。

一九四七年一〇月六日この日の前後、鶴見祐輔が訪ねて来て、アメリカの占領政策や新渡戸稲造について語り合う。

一九五三年九月二三日国際連盟時代に一緒に仕事をした川西実三が、ＩＬＯのアジア地域会議に出席するために来日したスイス本部のフランス人ルイ・クレンジーを連れて訪ねてきて、懐かしい話にはずむ。雨の中、共に多磨墓地の新渡戸稲造の墓参りをする。



成城大学民俗学研究所提供

（裏書　柳田自筆）
大正十年九月七日
国際連盟総会
会場入口
原田（健）
柳田
森戸（辰男）
新渡戸
大沢（章）
町田（梓楼）

「国際連盟の会議の多くはレマン湖左岸にあった宗教改革ホールで開催されていたが、写真の建物は同ホールに隣接していたホテル・ビクトリアのエントランスとみられる。同ホテルには、連盟総会の事務局が置かれていた。」（民研報告第三〇号『国際化の時代と柳田國男―ジュネーブ写真と資料で見る海外体験―解説・目録』（成城大学民俗学研究所、二〇一七年一一月）より）

ここまできてようやく私たちは、新渡戸稲造と柳田国男の繋がりを考える共通の場所に立つことができ、本稿の主題に入ろうと思う。

二、「地方の研究」からの宿題

1、「地方の研究」における子供分析の先見性

新渡戸稲造の「地方の研究」に次のような一節がある。

「西洋の子供は、日本の子供とは大変違ふと思ふ。子供を相手に話すことがあるが、日本の子供に試みて御覧なさい。何かやつて居る。例へば子供が此「コツプ」を持つて遊んで居る。『坊ちやん何を持つて遊んで居るの』と問ふと、「コツプ」を持つて遊んで居るのと答へる。『なぜ』と問ふと、『なぜつても』といふ。試して御覧なさい。『なぜ』といふと、『なぜでも』といふので何も理由がない。ソンナことは答弁の限りでないといふ風である。（笑声起る）西洋の子供に聞いて御覧なさい。『なぜ』といふと、ビコーズ　といつて、頻りに説明しやうとして考へる。そこが貴い所で、都会と田舎てはさういふことがありはせぬかと思ふ。」

この新渡戸の指摘は、現代でも通用し、柳田も笑ったであろう「笑声起る」は、私たちの笑い声でもある。「なぜつても」を現代語に直せば、「だって」「どうしても」の現代若者言葉と同等であろう。この新渡戸の指摘の重要性に気付いた鶴見太郎は、著書『ある邂逅　柳田国男と牧口常三郎』[xii]において、次のように問題を提起している。

「ステロタイプ化された答えが常に用意されているか、もしくは対象となるものへの疑問をしっかり捉えることのない日本の子供、そしてその背後にある児童教育のあり方に対する鋭い警告であった。」

鶴見は、この指摘に続けて新渡戸の地方学は、「対象を如何に自分に関連付けて説明しようとするか」の態度を重視していると位置づけ、牧口常三郎の「直観科」としての「郷土科」と相通じるものがあると論を展開するのである。私は、この鶴見の書から多くのことを学び、以降、ずっと温めてきた課題がある。それは、この時の新渡戸の指摘は、牧口だけでなく柳田、沢柳政太郎、留岡幸助ら参加者全員が納得するものであって、牧口の「郷土科」だけでなく、柳田の国語教育と「柳

田社会科」、沢柳の「自学学習」、留岡の「家庭教育」すべてに通底することではないかの一点である。前述の先行研究で論じられてきた新渡戸の地方学と柳田の郷土研究[xiii]の繋がりを越えて、柳田国男の教育思想との関連で論じてみたいというのが、本稿の私の目的である。

それにしても、新渡戸稲造は、講演の演台に置かれたコップを使って、現代にまで通じる子供論や教育論をわかりやすく論じているが、この手法は新渡戸の得意とするところであったらしい。「地方の研究」を要約して載せた『随想録』[xiv]には、他四つの講演が付録で掲載されていて、「教育の目的」にも、コップを使った説明がなされているのは興味深い。[xv]

2、「地方の研究」と柳田国男の子供観察

この「地方の研究」の影響と決めつけることはできないが、全国を歩いた柳田が、旅先で子供に話しかける場面が多いことと無縁ではないと、私は思う。柳田は、道案内や荷物持ちを子供に頼み、さりげなくその子供たちの生活を聞きとっている。たとえば、「私一箇の為に、最も記念すべき旅行の年」[xvi]であった大正九年（一九二〇）の「最も自由なる旅行」となった「秋風帖」の旅の場面である。遠州の二俣から三河に向かう途中、上阿多古の山村の描写である。

「嶺には必ず僅な平地があり、人家が有る。越えて向へ下ることを、此辺では「ひつくりかへる」と謂ふ。脊戸から直にひつくり返るやうな処にも、寒いであらうに古さうな農家が住んで居る。自分を案内してくれた二年生の児童は、何れもそんな家の子であつた。」[xvii]

この「秋風帖」の旅の前に東北を回った「豆手帖から」の旅や、沖縄への「海南小記」の旅のなかでも、子供と触れ合う場面が多い。拙稿の年譜にも、次のように表してみた。

「一九二〇年九月五日　尻労を発ち、居合わせた姉弟の二人の子供に道案内を頼み、猿ケ森までの道を歩き、子供たちと別れて、田名部へ向かう。」

「一九二一年二月九日　子供たちの「今何時ですか」の遊びに驚きながら、西仲間集落を後にし、網野子峠を越える。」

前者は、下北半島の尻屋岬の村から田名部（現むつ市）に向かう道の話で、後者の話は、沖縄からの帰りの奄美大島での話である。奄美大島での話は、「今何時ですか」と題され『東京朝日新聞』連載の「海南小記」に発表された。「実に奇妙な

子供の遊が流行している」で始まる話は、見馴れぬ人が通ると、子供たちの間で、その人の時計が金か銀か大きいか小さいかを予想し、「今何時ですか」と聞いて誰が勝ったかを決める話を紹介している。柳田は、こうした流行に、まだ不明の原因が潜んでいるとしたあと、この島の子供たちの特徴を次のように言う。

「土地の人にもさう謂つて来たことだが、大島の子供にはぜんたいにおつとりとした処が少い。一つには普通教育と云ふ特殊の事情の為かも知れぬが、通例人に聞えるやうに仲間同士で喋る代りに、臆面無く旅人に話しかける者が多かつた。山の蔭では四五人の子が目白を捕つて還るのをぢつと見ると、すぐに買ひませんかと謂つた。町へ持つて行くと一円になりますよと次の子が謂つた。又或板橋の上で遊んで居る夕方の群れに此狗の子は誰のだと聞くと、其はワームン（吾物）だ、貰つてくれるなら縛つてあげましょうと謂つたのが、ほんの十一二の生徒であつた」[xviii]

「ぢつと」見たり、この子犬は誰のかと「聞く」柳田の姿は、晩年まで続く。道を知っていても、わざと子供に声をかけて尋ねることもあるほどだ。晩年になって、都会の子もしっかり受け答えができるようになってきたとつぶやくこともあるほどである。

実際に柳田国男と旅を一緒にして、子供に話しかける場面が多いことに驚く証言を紹介したい。

一九四一年の柳田の九州旅行に随行し、講演記録だけでなく、旅のエピソードをまとめた今野圓助の『柳田國男随行記』[xix]のなかの一節である。

「先生が、どんなに子どもを愛し、深い関心をその動作にもっていなさるかは、出発以来いたる所で見せられた。こんな汚い餓鬼がと思うような子どもにも、にこにこして、すぐ近くへ寄って行かれる。大和の八木の駅で電車を待つあいだのことだったか、四つくらいの幼児に、男の子が名所案内のペンキの看板を一つ一つ指さししながら、まるで出たらめに知っていることばを聞かせていた。自動車・人・電車・自転車などというのを、その子がじっと聞いていて、その都度うなずくように兄に笑いかける。これを先生がじっと見ておられ、

『自分に向かって言ってくれていることだけはわかるのだね。』

と、おっしゃった。それは、たんに子ども好きというだけではなくて、児童に対して、とくに、なみなみならぬ関心をいだいておられることに、今さらながら気がついたことだった。」

「児童に対する関心」とは、信仰、言語、民俗のすべての現象のなかの子供観を指すが、この根底に、新渡戸の「地方の

研究」からの宿題があったと断言してもよい。

3、柳田国男の「言語生活」への提言

新渡戸稲造からの宿題に答えるように、柳田国男の国語教育への提言もされ続けたと言える。簡単にその流れをまとめてみると、戦前の「昔の国語教育」[xx]を柱とした『国語の将来』と、戦後の柳田国男監修の国語教科書[xxi]を位置づけるとわかりやすい。しかし、この場で詳述すると柳田国男の国語教育論[xxii]になってしまうので、その背景にある柳田国男の「言語生活」への提言に絞ってみようと思う。

柳田国男の国語教科書づくりが軌道に乗り始めた頃、柳田は「言語生活」への提言を何度も試みている。そのなかで、二つの論考を紹介したい。ひとつは、一九五一年九月に刀江書院から出された『国語教育講座　第一巻　言語生活』[xxiii]であり、もうひとつが、一九五四年九月に洋々社から出された『明治文化史　第一三巻　風俗編』[xxiv]の「第一四章　言語生活」である。柳田が何に重きを置いていたのかを、項目名から探りたいと思う。

A　『国語教育講座　第一巻　言語生活』

一、言語生活
二、それぞれの役目
三、口ことばと書きことばとの疎隔
四、話しかた教育の必要
五、読みかた教育の弊害
六、思いことば
七、国語教育の方向
八、昔の国語教育
九、耳ことばを口ことばに

B　『明治文化史　第一三巻　風俗編』

一、文語と口語
　国語の歴史・漢字と漢文
二、文字教育と群れの教育
　漢学と素読・笑の教育
三、文章語の変遷
　漢語調・言文一致・暗記のわざわい
四、明治の国語教育
　片言の弊害・読み書き教育

一〇、書くことの目標
一一、耳ことばの整理
一二、「まなぶ」と「おぼえる」
一三、敬語について
一四、国語の造語力
一五、取捨の判断
一六、適切な表現の必要

五、明治の敬語教育
地方の敬語・敬語の歴史
六、標準語と方言
方言の撲滅・標準語化の運動・日常の言葉

こうして項目を比べてみても、柳田が「言語生活」の何を課題とし、何を提言しているかの大枠を捉えることができる。いくつかの注目すべき柳田の指摘を抜き書きしてみよう。

A「国語には「よみ」「かき」のみでなく、「言う」と「聞く」それに「考える、思う」という働きのあった事は、今までに気づかぬ人もなかったとは言えぬだろうが、その割に五つの働きの関連性における一連のものとして言語をみる習慣はなかったように思われる。」

「「よみかき」の能力だけから、人々の言語能力の判断はできぬことを、もう一度考え直す必要があろう。」

「現在われわれの日常の表現は大変必要に迫られているのに、相手の理解できるかどうかも考えずに、きまった形でしかものをいわない人はもう九十パーセントを占めてきて、しかもそのことばをとがめる者も笑う者もなく、普通に行われている。」

「われわれは国語教育がどういうことを意味するかを考えてみなければならぬ。単に新聞雑誌が多くなったからといって、読みかた一つでさえもよくなったと軽々しくはいえぬばかりか、むしろ、少しずつではあるが人々は自分の思うことがいえなくなっている状態である。」

B「少なくとも国語教育に関する限り、この解釈（寺子屋を教育史の始まりとし、これ以外を無教育とする）はあやまりである。我々は一人残らず、初めて日本語を学んだのは母からであった。親と家庭の長者とは、各々意識した国語教

育の管理者ですらあった。」

「明治の国語教育は、文字を教えさえすればよいという間違った考えの下に進められた。」

「この国語教育には重大なる脱落のあることに気づかずして今日に至り、日本の国語を現在の如く混乱せしめたのである。その重大なる脱落とは、話し方、即ち口言葉の教育〟あった。」

「明治に始まった国語教育が片手落ちなので、読み書きに片より、読み書きのみを尊敬するあまり、言葉それ自身に対する意味を理解する適切さを失ったことにある。（略）かかる弊を改めることが、第一の急務であると私などは考えているのである。

はっきりいうならば、聞き手に理解できる言葉を使える教育、他方、人のいうことを適切に理解し、またそれは判らぬと明白にいえる人間をつくりあげる教育にせねば、せっかく立憲国・民主主義国家となっても、現在の如き国語教育のままでは効果があがらない。

現在の日本は、少数の人がえらくなるよりも、多数の人が幸福にならねばならぬときである。明治以来の国語教育に対して三省の要があろう。」

「明治の国語教育と共に、心の言葉―それぞれの地方の言葉―方言の撲滅が始まり、敬語をも標準語をもって教えようとした。」

「明治にはじまった標準語運動が、方言の度外視に端を発し、そのために国語を一層混乱と零落に陥れたとしたら、局に当った人々の責任もまた大きいものがある。」

こうした柳田の論を走り読みしただけでも、新渡戸の宿題に正面から答えていこうとする柳田の姿勢を感じることができると思うのだが、私の読み過ぎであろうか。

もう一つ強調すべき点は、この柳田の近代学校国語教育批判は、戦後になってからのものではなく、前述の「昔の国語教育」をはじめとする『国語の将来』のなかで孤軍奮闘のような形で続いていたという点である。

そのなかの柳田の言葉もひとつ、ここで引用しておきたい。

「次の代の国民に、出来る限り片言をいはせない様にすること、是を私などは国語教育の一ばん重要なる役目と心得て居る」

「少しの生活史も持たない文章だけの日本語、一度も胸の中で使って見たことのない単語が、横行闊歩して居るのでさう感じられる。愛する同胞国民だけは九官鳥にしてはいけない。」

これらの発言は、一九三五（昭和一〇）年四月、初等国語教育研究会での講演で、『柳田國男全集』第一〇巻に収録したが、その拙稿の解題で、初出雑誌の『方言』にあって『国語の将来』収録の際に削除された柳田の文章を紹介した。要旨は、この講演をすませて帰る道で、自分が発した「非難攻撃」は自分に向けられるもので、自分の責をもっと強く責めなければいけないと一人笑いをしたという内容である。[xxv]前述の戦後の提言の時も、その思いは繰り返し抱き続けたであろう。

三、柳田国男の「思い言葉」教育

1、「是からの国語教育」の核心

柳田国男は、戦前から子供たちが、その「思考と感情とを、伸び伸びと発育」し、自分の思ったことを自由に表現させたいと願い、戦後の国語教科書監修に力を注いだ。そして、それらの情熱の背景には、新渡戸稲造の「地方の研究」で例として話された日本と欧米の子供たちの実態があることをみてきた。最後に、前述の「言語生活」で一段と目を引く項目「思いことば」について考えてみたい。

柳田が、この「思ひ言葉の教育」を使ったのは、一九四六（昭和二一）年一一月、国語教育学会戦後第一回目の大会での講演「是からの国語教育」[xxvi]であった。柳田は、従来の国語教育においては「理解の国語教育」は進んだが、「表現の国語教育」は「まだちつとも行はれて居ない」とし、「もしも表現といふことを思慮の構成、即ち思ひ言葉、腹で使つて居る言葉にまで推し及ぼすならば、是は殆ど言語生活の大半を占むるものである」と位置づけ次のように続けている。

「新しい用語であるが、この私の所謂思ひ言葉の教育は、当然に学校の管轄であり、又それを有効に実行する手段として、話方といふ科目は新たに創設せられたものと解すべきである。従つて又模倣と下ごしらへと暗記を専らとする一種の演奏を以て、話方教育の目的と見ることは誤りだと言はなければならない。」

さらに、会に集まった国語教育研究者たちに、「始めて世の中に眼をあけた児童たちと一緒に、国の言葉の大きな力を意識し、そのくさぐさの働きに驚いて、どうして斯うなのかを尋ねずには居られぬやうな、素朴な感覚を抱くことが、果たして先生たちに出来るだろうか」と鋭い問題を投げかける。その上で、前述の「言語生活」の中心項目「思いことば」があることを前提に、読み進めてみたい。

2、「思いことば」で語られたこと

柳田は、「話し方教育」の必要性は認めながらも、戦後教育の中で、発表、演説、学芸会などの「晴れの表現」に重きがおかれ、日常家庭生活の「褻の言葉」まで教えようとしていないと批判し、次のように述べている。

「今でもおそらくは、教育の必要のない話しかた（日常家庭生活中の俗事の表現）があると思っている人々がいるであろうが、それは是非たたかって改めさせねばならぬ。それを認めているようでは、ことばのうちわの働き、たとえ話し相手のいない一人の時にも、ことばを使っていきてゆくという「思いことば」の発達がなくなるのである。その任務は重いが、それが容易ではない。」

「たたかって改めさせねばならぬ」とは厳しい言葉である。さらに「読みかた教育の弊害」を述べ、「思いことば」の項に入る。それは、「口ことば」「手ことば」と同じように「心ことば」であるとして、べつに新しいことではなくて、「人は持ってみたことばでないと使えないのだから、それを経験させること」が、重要な国語教育だと主張する。

柳田は、この「思いことば」の重要性を、新聞を通じて広げようともしている。一九五一（昭和二六）年七月四日付けの『朝日新聞』大阪本社版の学芸欄の「思い言葉」xxviiである。冒頭と末尾の文章を紹介しよう。

「国語教育は昔から読み方と書き方の教育のみを重視してきて最も根本的なものを忘れていた。それは「思い言葉」の教育である。「話し方」というのは、むしろその効果を意味する。すなわち自分の思いまたは感ずることを、その通りに言葉で表現させる教育のことである。」

「「言語に絶する」とか「いうにいわれぬ」とかわれわれがよく使う言葉は、全く「思うことを思うようにしゃべる」教育をしなかった従来の国語教育の罪でもあり、それがついに「言語に絶する」思いの敗戦に導いたことを考えると、

「思い言葉」の国語教育における必要性が痛感されるのである。」

片方で教科書監修という「穏便」な戦い方を選択し、片方で、従来の国語教育に真っ向から闘う姿勢を見せる七六歳の柳田の脳裏に新渡戸稲造のコップを例にした話がよぎったと考えても不思議ではない。なぜなら、「なぜつても」も「どうしても」も「いうにいわれぬ」も、新渡戸の言う「ビコーズ　アイ　シンク・・・」につながる言葉ではない片言言語であるからだ。

四、今後の課題

本稿の依頼を受けた時、成城大学民俗学研究所（柳田文庫）で見た何枚かの写真を紹介するつもりでお引き受けした。しかし、それだけでは不十分と思い直し、前述の鶴見太郎の指摘を得てから、ずっと温めてきた課題にも触れようと考え筆を進めることとした。今読み返してみると、思い込みが強すぎ、論が飛躍しているとご指摘を受けるのではないかと思われる箇所がいくつもある。今後、柳田国男の「思い言葉」論を軸に、「柳田国男のコミュニケーション力」をまとめたいと考えているので、お許しいただきたい。

そして、もうひとつ、本論に入る前に評価した後藤総一郎と、柳田国男の国語教育論をまとめた庄司和晃は、私の人生の師で、その二人を同時に意識しながら論を進めることができたことに感謝したい。

とくに、庄司和晃三段階連関理論で、「思い言葉」を位置づけると、「感じ言葉」→「思い言葉」→「考え言葉」となって、「思い言葉」獲得のプロセスが明らかになったことも収穫であった。柳田国男に、この論理学の手法を届けたいと思うほどである。

さらに、新渡戸稲造の「地方学」のなかに、柳田国男の「史心教育」[xxviii]や地名研究[xxix]の原形があることを、今回論じることができなかったので、今後の課題として自らに課すことをお誓いして手を休めることとする。

註

1、橋川文三「柳田国男」（『世界の知識人　20世紀を動かす人々』講談社、一九六四年八月）

2、田山花袋の小説『妻』において、松岡国男をモデルとした西の「恋歌を作ったって何になる」と述べる「詩のわかれ」の宣言の一節。
3、後藤総一郎「地方学の形成―柳田民俗学の原点」は、『地方史研究マニュアルⅠ』に掲載されたのち、後藤の三冊目の柳田国男論となる『柳田学の思想的展開』（伝統と現代社、一九七六年十一月）に収録された。
4、胡桃沢勘内（一八八五―一九四〇）松本在住の俳人、郷土史家。『郷土研究』第二巻第一号（一九一四年三月）に平瀬麦雨の号名で「犬飼山の神おろし」を投稿してから、毎号のように報告や資料紹介を載せる。昭和に入り、「話をきく会」を組織し、信濃の民俗研究を牽引した。五十五歳で亡くなった勘内の死は、これからという時の柳田国男の学問にとって大きなダメージとなった。
5、村松玄太の同論文は、『政治学研究論集』第一四号（明治大学大学院政治経済学研究科、二〇〇一年九月刊）に掲載された。
6、村松玄太「柳田国男の地方観」（『常民大学紀要２　柳田国男のアジア認識』後藤総一郎編、岩田書院、二〇〇一年九月刊）。同論文は、前年の二〇〇〇年一一月明治大学で行われた第一七回常民大学合同研究会での研究報告の記録である。
7、藤井隆至「資料　柳田国男に宛てた新渡戸稲造書簡」（『新渡戸稲造研究』第二号、一九九三年九月、新渡戸稲造会発行）。
8、山下一仁『いま甦る柳田國男の農政改革』（新潮社、二〇一八年一月）。
9、佐谷眞木人『民俗学・台湾・国際連盟　柳田國男と新渡戸稲造』（講談社、二〇一五年一月）。
10、並松信久は、「柳田国男の農政学の展開―産業組合と報徳社をめぐって―」（『京都産業大学論集』第二七号、二〇一〇年三月）と「新渡戸稲造における地方（ぢかた）学の構想と展開」（同　第二八号、二〇一一年三月）を続けて発表し、さらに翌年、『近代日本の農業政策論　地域の自立を唱えた先人たち』（昭和堂、二〇一二年四月）をまとめている。
11、『柳田國男全集』別巻１（筑摩書房、二〇一九年三月）。同全集は、本巻三五巻までの刊行を終え、補遺編、書簡編、索引を残すまでとなった。「年譜」は、本来であれば補遺編、書簡編のあとに出されるものではあるが、書簡編をまとめるのに時間がかかるため、先の刊行となった。いずれ全集完結のあとに、書誌年譜と合体した柳田国男年譜の再編成を目指したいと考えているので、新情報や間違いの指摘などお寄せいただきたい。
12、鶴見太郎『ある邂逅　柳田国男と牧口常三郎』（潮出版社、二〇〇二年一一月）。
13、柳田国男の「郷土研究といふこと（原題「郷土研究の目的」）」が、ほぼ新渡戸稲造の「地方の研究」に答える形の講演記録であることは、間違いない。同論文は、『青年と学問』（『柳田國男全集』第四巻）に収録されているので参照されたい。
14、新渡戸稲造『随想録』（丁未出版社、一九〇七年八月）には、「地方の研究」「教育の目的」の他に「カーライルとゲーテ」「桃太郎遠征譚」「分福茶釜の解」の講演要旨が付されている。新渡戸の桃太郎説や昔話解釈が、柳田の研究とどう交差しているかは、今は未だ空想のなかにある。
15、新渡戸稲造「教育の目的」は、筑摩書房刊の明治文学全集第八八巻『明治宗教文学集（二）』に収録されている。
16、柳田は、大正八（一九一九）年暮れ、貴族院書記官長まで勤めた官僚生活にピリオドをうち、この年、佐渡、東北、中部、近畿と回る旅

を指す。辞任から朝日新聞社との契約までの経緯は、「年譜」を参照されたい。

17、「野の灯、山の雲　上」（『東京朝日新聞』一九二〇年一一月四日付け。のちに『秋風帖』に収録。『柳田国男全集』第六巻）。

18、「今何時ですか」（『東京朝日新聞』1九二一年四月、のちに『海南小記』に収録。『柳田国男全集』第三巻）。

19、今野圓助（圓輔）『柳田國男随行記』（秋山書店、一九八三年七月）。今野は、一九四一年慶應義塾大学を卒業、毎日新聞社記者として働きながら、柳田国男に師事、戦後、民俗学研究所理事を務める。本書は、一九四一年一一月一三日から二八日までの近畿、九州講演旅行の随行記である。

20、「昔の国語教育」（『岩波講座国語教育』第五巻、1九三七年七月。一九三九年九月に創元社から刊行された『国語の将来』に収録される。『柳田国男全集』第一〇巻）。柳田国男の国語教育論の中核的論文と評価され、庄司和晃によって、学校国語に相対する前代及び庶民の国語教育として光が当てられた。

21、東京書籍刊『新しい国語』。一九四八年五月、東京書籍株式会社の小中学校国語検定教科書の監修を受諾してから、一九六〇年九月高齢を理由に辞任するまでの一二年間、国語教科書づくりに関わる。中以下の子供の幸せを願い、古典よりも近世の紀行文や日記を重視し、話し方、聞き方の教育を主張した編集方針は、「柳田三原則」と言われ注目を集めた。

22、庄司和晃『現代国語教育論集成　柳田国男』（明治図書、1九八七年）を参照されたい。

23、『柳田國男全集』第三一巻収録。

24、『柳田國男全集』第二二巻収録。

25、この削除した柳田の文章は、「今後なほ多くの実例を挙げて、もう少し穏便な説き方をすべきものだと思ふ。」で終わっている。私は、この解題の最後を、「この自責の念からの言葉は、見ようによっては、柳田の意図と反対の方向へ向かおうとしている国語政策への一矢とも言える」と結んだ（『柳田國男全集』第一〇巻）。

26、『標準語と方言』（明治書院、一九四九年五月）『柳田國男全集』第一八巻収録。

27、『柳田國男全集』第三一巻収録。

28、柳田社会科のキーワードのひとつ。無意識の歴史意識と言い換えてもよい。庄司和晃の全面教育学研究会での研究成果を生かし、いずれ詳述したいと考える。

29、柳田国男の地名研究と、現在まで引き継がれている日本地名研究所を中心とする地名研究については、谷川健一論を共有のものとしながら、二〇二一年に開かれる第四〇回全国地名研究者大会の大きなテーマとする予定となっている。私が編集長を務める『地名と風土』の今後にもぜひ着目していていただきたい。なお、興味がある方は、二〇一五年三月に刊行した同誌第九号の「特集Ⅱ　柳田民俗学と地名研究」の拙稿「柳田国男年譜に見る地名への視座―柳田国男・山口貞夫・松永美吉を結ぶ線―」を参照されたい。

（『新渡戸稲造の世界』第二八号、新渡戸稲造基金、二〇一九年九月刊）